



プロップとはラグビーのポジションで支えるという意味がある。ナミねえの「みんなが支え合う社会になってほしい...」という願いがこもっている

Kobe Rokko-island Apr. 2019.

な表情で言った。強いショックを受けた。

「なんで死ななあかんの。これまで私がいくら悪いことをしても取り乱さず優しくかった父が、こんなに動揺して心配している。こんな世の中、変えなあかん」
そう思うと持ち前の反抗心がむくむくと湧き起こり、麻紀さんと生きるための

挑戦が始まった。

医学書を読み、病院に専門医を訪ね、障がい者医療や福祉の勉強をし、施設でのボランティア活動も始めた。そのなかで気づいたのは、障がい者は、かわいそうな人ではないということ。そして「社会参加したい、貢献したい」と思っている人が多いということ。時は1990年代。ちょうどパソコンの黎明期だった。

パソコンが使えれば在宅でもベッドの上でも仕事ができるのではないかと考え、西宮市内で障がい者を対象にパソコンセミナーを始めた。自身はパソコンが得意ではないと言うナミねえは、営業を担当。企業の経営者に障がいがある人も使いやすいパソコンの開発を依頼したり、仕事を受注し、技術を身に着けたチャレンジドたちに振り分けたりした。やがて起業をしたり、感性を生かしてアーティストとしてデビューする人たちも増えていった。

「娘の麻紀が私を更生させてくれたんです。今年46歳になりましたが、永遠のベビーちゃんのような麻紀の存在が、私のパワーの源になっています。この娘を残して私が安心して死ねる世の中にした。それが、おかんのたくらみや」

活動を始めて30年近くが経過したが、就労支援はまだ道半ばと言う。雇用率を高めるだけではなく、チャレンジドが誇りをもてるような多様な仕事を生み出す制度をつくらないといけないと力強く語る。

楽しみは、還暦を過ぎてから始めたライブ活動。プロミュージシャンの第二人が協力してくれ、年に数回、ライブハウスで歌っている。バンド名は「ナミねえバンド」。ステージでは、越路吹雪のナンバーや童謡を歌い、トークもする。

「昔ね、麻紀が発作でつらそうなきき、耳元で歌うと不思議と落ち着いてくれる。歌にはそんな力があるんやね」。